



関東甲信越ブロックのHIV医療体制整備

分担研究者 茂呂 寛

新潟大学医歯学総合病院感染管理部 准教授

研究要旨

HIV診療体制の均てん化に加えて、長期療養に伴う課題に取り組んでいくうえで、ブロック内では課題の情報共有を進めるとともに、人材の確保と育成を進め、診療体制の発展を図る必要がある。一方、本研究期間の活動は、新型コロナウイルス感染症により大きな影響を受けた。HIV感染者をいかに感染、重症化から防ぐかが重要な課題であるが、コロナ渦による感染対策に対する意識の高まりは、HIV診療にも結びつけていくことが可能と考えられた。

A. 研究目的

関東・甲信越ブロック内において、HIV/AIDS診療に必要とされる基礎的な知識の普及を図り、医療水準の向上に結び付ける。さらに、医療機関同士の連携を強めると共に、長期療養時代を見据え、拠点病院以外における症例の受け入れ体制を整備する。

B. 研究方法

1) HIV/エイズ症例の動向と診療実態の把握

関東・甲信越ブロック内におけるHIV/エイズ診療の実情を把握する目的で、エイズ治療拠点病院を対象にアンケート調査を実施した。

2) HIV/エイズ診療体制の均てん化への取り組み

中核拠点病院連絡協議会、医療従事者を対象とした講演会、研修会、検討会を企画・開催し、人的交流と共に経験と知識の共有を図った。さらに、各都県で中核拠点病院を中心にHIV診療水準の向上を目的とした啓発及び教育活動を進めた。

3) HIV 基礎知識の啓発活動

一般層を対象とし、HIV感染症に関する最新知識の普及と早期発見に向けたスクリーニング検査の促進を目的に、各自治体との協力の下で、地域毎の特性を活かした啓発活動を企画した。

(倫理面への配慮)

アンケート調査の実施、臨床研究、講演会や検討会での症例提示にあたり、匿名化を徹底するなど、個人情報保護に十分な配慮を行った。

C. 研究結果

1) HIV/エイズ症例の動向と診療実態

エイズ治療拠点病院に対するアンケートの回答率は90%以上であった。ブロック全体での全受診者数は、令和4年度の調査で14,781例（うち新規1,698例）、薬害被害者は252例であった。地域別に見ると、首都圏、特に東京への一極集中の傾向が確認された。

2) 会議・講習会・研修会の開催状況

- 関東甲信越HIV感染症連携会議
- 令和4年度関東・甲信越ブロック都県・エイズ治療拠点病院等連絡会議
- 北関東・甲信越HIV感染症症例検討会
- その他、職種別の連絡会議など

3) 地域における活動

例年は新潟県内の拠点病院以外の医療機関を対象に、希望があった施設に医師、コーディネーターが向かう形で、出張研修を6-10施設/年程度行ってきたが、研究期間中は新型コロナウイルス感染症の流行拡大を受け、WEBでの開催形式をとった

D. 考察

長期療養に伴う課題については、C型肝炎の治療、歯科診療体制と透析医療体制の確立、生活習慣病のコントロール、メンタルヘルスの管理、整形外科領域とリハビリテーションの充実、悪性疾患のスクリーニング、などへの対応が求められている。引き続き、ブロック内の網羅的な状況把握に努めると共に、肝移植や重粒子線治療などの先進治療を、必要な際にオプションとして選択できるよう、症例検討会などの企画でこれらの話題を取り上げることによって、周知徹底を図る方針とした。

合わせて、北関東・甲信越地区では症例数が限られるため、一例ごとに丁寧に対応可能である反面、医療者側で診療経験が不足する懸念がある。このため、症例検討会などを通して経験を共有する取り組みが必要と考えられた。

地域で実効性のある診療体制を構築していく上では、対応可能な医療機関の拡充と、対応可能な医療者の確保・育成が重要な課題と考えられる。ブロック拠点病院の立場として、こうした課題に向けて取り組んでいく必要がある。合わせて、HIV感染症を無理なく受け入れられるような社会の成熟が望まれ、医療従事者だけでなく一般層を対象とした啓発活動も重要な課題である。

本研究期間、新型コロナウイルス感染症が大きな影響を及ぼし、特にオミクロン変異株により、かつて無い規模での流行がみられた。HIV診療の担当者が、同時に新型コロナ感染対策を担う場面も多く、HIV診療体制の堅持にあたり、医療機関への負担が非常に大きかった一方で、WEB会議が広く浸透することになり、ブロック内で複数の県をまたぐ会合など、移動の負担を軽減できた意義は大きい。今後この流れは加速することが予想される。

こうした経験の蓄積が、HIV診療において将来的に貴重な財産となるよう、引き続き取り組んでいく必要がある。

E. 結論

診療体制を維持、発展させていくためには、人材の確保と育成が不可欠である。ブロック内で症例検討会などの機会を企画し、若い世代が研鑽を積める場を用意すると共に、各職種間での垣根を超えた人的交流の場としても活用していく方針が考えられた。コロナ禍にあっても、常に最新の情報を更新しながら、課題の把握と対応に継続して取り組んでいく必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Hakamata M, Takihara H, Iwamoto T, Tamaru A, Hashimoto A, Tanaka T, Kaboso SA, Gebretsadik G, Ilinov A, Yokoyama A, Ozeki Y, Nishiyama A, Tateishi Y, Moro H, Kikuchi T, Okuda S, Matsumoto S. Higher genome mutation rates of Beijing lineage of *Mycobacterium tuberculosis* during human infection, Scientific Reports 2020 17997
- 2) Yuuki Bamba, Kei Nagano, Hiroshi Moro, Hideyuki Ogata, Mariko Hakamata, Satoshi Shibata, Takeshi Koizumi, Nobumasa Aoki, Yasuyoshi Ohshima, Satoshi Watanabe, Takeshi Nakamura, Sugako Kobayashi, Yoshiki Hoshiyama, Toshiyuki Koya, Toshinori Takada, Toshiaki Kikuch. Efficacy of the new β -D-glucan measurement kit for diagnosing invasive fungal infections, as compared with that of four conventional kits, PLOS ONE 16(8) e0255172, 2021

2. 学会発表

- 1) 青木志門、小泉 健、阿部静太郎、袴田真理子、永野 啓、柴田 怜、青木信将、茂呂 寛、小屋俊之、菊地利明. 当施設における肺非結核性抗酸菌症の状況～治療の状況を中心に～. 第118回日本内科学会総会・講演会, 東京, 4月, 2021.

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし